

戦死者とナショナル・アイデンティティ

——国立墓地の形成過程に見る南北戦争の「語り」と reunion——

渡 部 純

1

Benedict Anderson はかつてナショナル・アイデンティティの形成にとって「無名戦士の墓」が象徴的に持つ意味の大きさを指摘した。

No more arresting emblems of modern culture of nationalism exist than cenotaphs and tombs of Unknown Soldiers. The public ceremonial reverence accorded these monuments precisely *because* they are either deliberately empty or no one knows who lies inside them, has no true precedents in earlier times. To feel the force of this modernity one has only to imagine the general reaction to the busy-body who 'discovered' the Unknown Soldier's name or insisted on filling the cenotaph with some real bones. Sacrilege of a strange, contemporary kind! Yet void as these tombs are of identifiable mortal remains or immortal souls, they are nonetheless saturated with ghostly *national* imaginings. (This is why so many different nations have such tombs without feeling any need to specify the nationality of their absent occupants. What else could they be but Germans, Americans, Argentinians ...?)⁽¹⁾

アメリカにおいて固有名詞で語られるところの「無名戦士の墓」は、ポトマッ

ク川を挟んで首都ワシントンを見下ろすアーリントン国立墓地の高台にある。そこは、まことに独特な様式に従った衛兵による 24 時間監視の下にある。日没閉門後、深夜に至っても厳格に繰り返されるその儀礼の様は、確かにそれがすぐれて象徴的な営みであることを示すものであろう。

年に一度の戦没将兵追悼の日、5月の最終月曜日のメモリアルデイには、大統領が、この「無名戦士の墓」に花輪を捧げ、隣接する円形劇場での追悼行事に臨む⁽²⁾。この日、この墓地の 30 万を超える全ての墓にはアメリカ国旗が掲げられているのを見ることができただろう。このようにして維持されている空間は、確かに、国家の存立の根幹に関わる何かを感じさせるところがある⁽³⁾。

2

ただし、この国立墓地に埋葬されているのは、戦死者だけではない。現在ここに墓地を持ち得る資格は、以下の通りである⁽⁴⁾。

- (1) Current and former presidents of the United States(最も高名なのは、アーリントンハウスの直下にあつて、アーリントン・メモリアル橋からリンカン記念堂までをまっすぐに遠望するジョン・F・ケネディの墓)
- (2) Any former member of the Armed Forces who served on active duty and held an elective office of the federal government or the office of chief justice or associate justice of the Supreme Court(オリヴァー・ウェンデル・ホームズ・Jr やアーサー・ウォーレンの墓がある。ウォーレンの隣の隣はジョン・フォスター・ダレスである)
- (3) Service members on active duty
- (4) Those with at least twenty years of active duty
- (5) Those on active reserve who qualify for pay upon retirement or retire at age sixty

- (6) Those retired for disability
- (7) Veterans honorably discharged with a disability of 30 percent or greater before October 1, 1949
- (8) Those who have received one of the following: the Medal of Honor, the Distinguished Service Cross, the Air Force Cross, the Navy Cross, the Distinguished Service Medal, the Silver Star, or the Purple Heart
- (9) Former prisoners of war
- (10) Spouses or unmarried minors of any of the above (J・F・ケネディの隣にジャクリーン・ケネディ・オナシスと、彼らの二人の子どもの墓がある)

このような原則からして、2001年の「9.11テロ」については、それがブッシュによって「新しい戦争」と呼ばれはしたものの、ワールドトレードセンタービルの死者たちはもちろん、さらにその救助にあたって犠牲となり国家的英雄とも称えられた警察官や消防士たちも（当該資格のある退役軍人やその家族でなければ）、アーリントン国立墓地に葬られることはない。しかし、他方、同日のペンタゴンの犠牲者はここに墓地を持ち得るのである⁽⁵⁾。

ただ、このような原則は現在のものであって、ここには、南北戦争時代に埋葬された civilian や citizen の墓も 3800 以上ある⁽⁶⁾。また、アメリカ以外の国籍を持つ者の墓も 62 ある。

3

多くの墓標は白い大理石で作られており、だいたい幅 10 から 12 インチ、厚さ 4 インチ、ほぼ画一的で整然と配列されているが⁽⁷⁾、第 1 区画にある古いもの、また、政治家・裁判官のものなどは、一つ一つ異なる⁽⁸⁾。同型の墓標の下でも、埋葬された個人の宗教は一律ではなく、キリスト教各派のほか、ユダヤ教、ヒンドゥー教、イスラム教、さらには、金光教、生長の家、天理教、出雲

大社教、創価学会の信者の墓もある⁽⁹⁾。

一体に、死者に対する儀礼が、どこからが宗教的であるかを画定するのは、必ずしも簡単ではない。墓地において何らかに追悼を行なうこと自体が特定の宗教的な行為であるという考えもあり得る。あるいは、墓地内に「静粛と尊敬」という標識をたてること、つまり、墓地において（あるいは死体に対して）「静粛と尊敬」をもって振る舞うべしとすることが宗教的であるという考えもあり得る。だが、それぞれの墓は、芝生の上に25インチ程度の高さの白い墓標がたてられているだけで、折々に花が手向けられた墓も散見するが、埋葬後に墓前で何らかの儀式が執り行なわれることを想定したものではない⁽¹⁰⁾。

むろん先に触れたアーリントンにおけるメモリアルデイの行事がキリスト教の様式を踏まえたものであるのは明らかである。そこでは、従軍牧師が「アーメン」で閉じられる説話を行ない、大統領の演説でも「God」という言葉は頻出する。ただ、これらの「語り」は、基本的には、死者に対する敬意を表し今日の生者にとってのその死の意味を語るものであって、人が死後いかなるものになるかについての想定を前提としていない。この限りにおいて、それは特定の宗教による儀式とは言えず、死後についてそれぞれなりの教義を持ち信仰を異にする複数の宗教の信者たちが同席できるものになっているとは言えよう⁽¹¹⁾。

このようなどころからすると、特定の宗教的教義がアメリカの国立墓地の存立を支えているとは直ちには考えにくい。

4

そもそも、姓名・所属の判明しないアメリカ兵の遺体がすべてこのアーリントンの「無名戦士の墓」に集められ納められているのでもない。この墓は、現在では、第一次大戦、第二次大戦、朝鮮戦争、ヴェトナム戦争の各戦争での無

名戦士の遺体を一体ずつ納める形になっていて、現時点では、(次に述べるような事情で) この墓に葬られているのは、“three unknown servicemen” だけである⁽¹³⁾。しかし、UNKNOWN と刻まれた墓標はアーリントンの中にも、また、他の国立墓地内にも無数にあって、名前の判明しない遺体も原則として一体一体区別してそれらの墓に納められている。訪問者はその墓が unknown のものかどうかは、ひとつひとつ墓標を読まなければ区別できない。名前が確定されなくても、部隊名、あるいは出身州が判明している場合は、それが明記されている。

アンダーソンが着目するアーリントンの(固有名詞としての)「無名戦士の墓」への埋葬は、少なくとも現在では、大統領の政治的パフォーマンスに主導されている色合いが強い。例えば、レーガン大統領は、自分が1984年のメモリアルデイでヴェトナムに言及して追悼行事を執り行なうために、「無名戦士」の遺体を必要とした。そこで、ヴェトナムから持ち帰られ、特定できそうであった遺体の調査を徹底させず、ここに納めたのである。結局、この遺体は、1998年に詳しいDNA鑑定で特定され、「無名戦士の墓」から遺族の元へと返された。この遺族は、「無名戦士の墓」に納められたその「無名戦士」が自分たちの親族である可能性があることも長らく知らされず、その「帰還」を待ち望んでいたのであった⁽¹³⁾。つまり身元の確定しない死体は、確定されないからこそ政治的必要性に応じて自由に扱われたのであり、このような儀礼の対象となり得たと考えられる。

以上からすると、アーリントン国立墓地の固有の特徴は、ただ「無名戦士の墓」があることだけに帰せられるものではないように思われる⁽¹⁴⁾。そこで、本稿では、アメリカでの国立墓地の形成過程をたどりながら、アメリカにおけるナショナル・アイデンティティについて、戦死者の死の意義づけという観点から考察してみたいと思う。

5

戦争がその後の国家のあり方を大きく規定することはいうまでもない。それは、国家間関係だけではなく、国内政治的にでもある。戦争はとりわけ、公共的記憶・集合的記憶を媒介として戦後の政治過程に関与する⁽¹⁵⁾。したがって、この種の記憶の「語り」*narrative*の論理構造や、その語られ方を規定している要因を解明すること、また、そのような「語り」のあり方がその後の政治過程にいかに関与しているかを検討することは、重要な政治学的研究課題となるだろう⁽¹⁶⁾。

戦争の記憶の中核をなすのは、死者に関わる記憶である。多くの場合、公共的記憶となって語り継がれる戦争の「語り」とは、戦士の武勲の「語り」であり、それは、端的には、いかに殺したか、いかに殺されたかの「語り」である。そのような「語り」が国家のナショナル・アイデンティティを再生産する。死者に関する記憶の再生産の場が墓地である。

6

そもそも、国家はなぜ、国立墓地や追悼式典のような戦死者の包括的な（アンダーソンに即するなら、無記名の）顕彰を行なおうとするのか。碩学エルンスト・カントロヴィッチは、その浩瀚な「祖国のための死」（*pro patria mori*）の研究において、「祖国」（*patria*）成立の条件として、その国庫・国土の「不可譲性」「永続性」が承認されることを挙げ、国王についての「不死の身体」というメタファーの成り立ちの重要性を指摘した⁽¹⁷⁾。その示唆するところから学べば、国家による戦死者の顕彰においては、過去から連なる無数の死者の列が示され、それらがすべて一つの国家のために捧げられたという「語り」が示されていることに

注意しなければならない。そのような「語り」によってこそ、「同一にして永続する国家」という像が与えられる。個々の戦死者の死が、ある時期ある時代における個別・特定の目的のためだと限定されたなら、「同一にして永続する国家」という像は生まれまいだろう。

戦死者は、個人が提供し得る最大の献身を国家に捧げている。国家の側からすれば、国家が不可分で永遠のものであるという擬制を説得的に提示できなければ、そのような献身を獲得できないだろう。国立墓地が厳粛に守り続けられているという表示は、また、残された者たちの生活を国家が永久に保障するという約束手形にもなっている⁽¹⁸⁾。

7

アーリントンをはじめとするアメリカの国立墓地が創設されるのは、南北戦争を契機としている。また、メモリアルデイの起源も、もともとは、南北戦争での戦死者の追悼の日である⁽¹⁹⁾。興味深いことに、アメリカにおいては、独立戦争での死者たちは、国家によって追悼されるべき戦没者にリストされていない。南北戦争前の戦死者がアーリントンに改葬されるのは、1900年以降のことである。

カントロヴィッチの用語を用いれば、南北戦争は、アメリカにおいて何が *patria* となるのか、何が住民がその死を捧げるべき祖国であるのかについての争いであったと言い換えることができる。最終的には北軍の勝利によって、*united states* が単一不可分の *patria* になることが確定された。だが、この戦争において USA を自らの *patria* と認めなかった者たちは、その後いかなる論理で、Union に統合されることになるのであろうか。この *reunion* の論理こそ、南北戦争を契機として現れるアメリカ国家に関わる「語り」の中核にあるはずである。

8

近年、アメリカ南北戦争史研究においてその死者の処遇に着目した新しい成果が現れている。2000年代に入って、Neff(2005)、Faust(2008)など興味深い成果が相次いでいるのは、「9.11」以後のアメリカにおいて、大量の死者の死の意味づけとの連関において、ナショナル・アイデンティティを再考察しようという関心の現れであるとも考えられる⁽²⁰⁾。ヨーロッパ史研究においては、とりわけ、第一次大戦の死者の扱いについてすでにいくつも業績があるが、南北戦争は、第一次大戦に先行する史上最初の総力戦でもあり、また、実際、戦没者を埋葬する国立墓地の建設は、アメリカの方がヨーロッパ諸国に先行していたにもかかわらず、これまでそれに対応した十分な研究はなかった⁽²¹⁾。それは、この戦争が内戦であって、国家を一つの単位とするナショナル・アイデンティティの形成にとっては、むしろ逆方向のモメントをはらむものと受け止められてきたからであろう。だが、南北戦争の死者をめぐる最近の研究は、戦後における死者の意味づけ過程、「語り」の生成過程が、アメリカのナショナル・アイデンティティ形成の基盤になったことを示唆する。それは敗者にいかに大義を与えるかということであった。

9

この考察を進めるためには、ともかくアメリカの国立墓地を具体的に知らなければならぬだろう。手始めに、ゲティスバーグ国立墓地を訪ねてみることにしよう。

ゲティスバーグ国立墓地は、ボルチモア国際空港から車で約2時間弱、ペンシルヴァニア州ゲティスバーグ国立軍事公園の中にある。ゲティスバーグは南

北戦争の雌雄を決した激戦の地として、また（あるいは、それ以上に）リンカンのゲティスバーグ演説の地として有名である。この軍事公園の大きな visitor center は 2008 年に新設されたもので、館内には、博物館や映画館があり、南北戦争、ゲティスバーグでの戦闘、そして、リンカンの演説について、詳細かつ身近に知ることができるように工夫されている⁽²²⁾。ここで戦いが繰り広げられたのは、1863 年の 7 月 1 日から 3 日までの三日間。リンカンの演説は、同年 11 月 19 日、ここに戦死者たちの墓地を開設する式典の中でなされたものである。

この墓地は一般のエヴァーグリーン墓地（1853 年開設）に隣接して設けられている。戦死者たちは、当初、このエヴァーグリーン墓地に特別の区画を設けて埋葬されていたが、やがて隣接地が買収され、戦士たちのための墓地が設けられた。この墓地は、1872 年に陸軍省に移管される。1895 年には議会が当地一帯を国立公園にするよう陸軍省に指示、1933 年 8 月 10 日からは墓地も内務省国立公園局が管理している。

ここゲティスバーグや次に見るアンティータムという国立墓地は、今日では、国立公園と位置づけられているため、ヨセミテ国立公園やグランドキャニオン国立公園と同じく、ナショナルパーク・レンジャーが案内に立つし、子どもたちを対象にしたジュニアレンジャー育成プログラムも設けられている⁽²³⁾。ここにアメリカのナショナル・アイデンティティの「語り」の特徴を見ることができよう⁽²⁴⁾。このような国立公園局管轄の国立墓地は、現在 14 ある。そのほかに復員軍人省管轄の国立墓地が 31 の州とプエルトリコに計 131 ある。そして、アーリントン国立墓地と United States Soldiers' & Airmen's Home National Cemetery(ワシントン DC) のみは今でも陸軍省の管轄下にある。

ゲティスバーグには現在、約 7000 の死者が葬られている。このうち、979 の遺体は、名前あるいは部隊が特定されていない。1869 年に建設された Soldier's National Monument(その礎石は、1865 年 7 月 1 日に敷設)を中心に、同心円

状に墓標が約4インチほどの高さで地表に埋め込まれている。これは一つが縦9インチ横143インチほど（ただし、一つの墓石に複数の名前が刻まれているものもあり、墓標一つ一つの長さは一律ではない）で、まるで円形に配置された低いベンチか敷石のように見える。ベンチとすれば座面にあたる上面に墓面がある。そこには有名のものも、無名のものもある。この墓標の形式は、アーリントンやアンティータムなどの国立墓地では見られず、ゲティスバーグのこのモニュメントの周囲に独自のものである⁽²⁵⁾。そしてその外周には、出身州別に無名戦士の小さな墓標も同心円状に並んでいる。こちらはただ上部に番号を刻んだだけの高さ5-6インチほどの四角柱である。

無数の墓標のほか、あちらこちらに様々な追悼碑 (Memorial) が置かれており、この追悼碑の前で行われる追悼行事もある⁽²⁶⁾。南北戦争の戦場では、そこで戦った部隊ごとに追悼碑が設置されているが、その部隊は基本的には州ごとに組織されていたので、結果的に、州単位の追悼碑を多く見ることができる。

この墓地に埋葬されているのは、Union、北軍側の死者に限られる。ただ戦争のさなかに死者を埋葬しているから、当初は、南軍の死者も混在していた。Gregory A. Coco の綿密な調査によると、ゲティスバーグ周辺に埋葬された南軍の死者は、名前が確認されただけでも、1394体あったが、これらは、1860年代から90年代に、他の墓地へと改葬された⁽²⁷⁾。最も多い移動先は、ヴァージニアの州都リッチモンドにあるハリウッド墓地である⁽²⁸⁾。ゲティスバーグからハリウッド墓地への遺体の移動は、1872年の6月13日、8月3日、9月10日、1873年の5月17日の4回にわたって行なわれている。

またゲティスバーグでの負傷者・病者でペンシルヴァニア州チェスターの Pennsylvania Gen. Hospital で死亡した Confederate の兵士92人は Chester Rural Cemetery に埋葬されたが⁽²⁹⁾、そのうち、84体は1891年にペンシルヴァニア州フィラデルフィア国立墓地に改葬された⁽³⁰⁾。フィラデルフィア国立墓地は、1862年に設けられた最初の14の国立墓地の一つであるが、ここは、有名184

体、無名 224 体の南軍の兵士を埋葬している。このうち 187 体は、1911 年に連邦政府によって建てられた The Confederate Soldiers Monument の下に埋葬されている⁽³¹⁾。

なお、Coco によると、現在でもゲティスバーグ国立墓地に埋葬されている（名前のある）死者の中にも、Confederate の兵士ではないかと疑われるものが、7 体残っているとのことである。

10

次にゲティスバーグから車で約 1 時間 15 分、メリーランド州アンティータム国立墓地を訪ねてみよう。アンティータムは、1862 年 9 月 17 日の激戦地であり、国立戦場史跡（National Battlefield）に指定されている。ワシントンからは約 1 時間半の距離であり、国立公園システムの中でも最も訪問者の多い戦場跡の一つであるが、当地が有名なのは、激戦地であったというだけでなく、ここで撮られた戦闘直後の戦死者たちの写真がアメリカ社会に大きな衝撃を与えたという歴史があるからでもある。それは初めて公開された戦場での戦死者たちの写真であった⁽³²⁾。南北戦争は、当時の最新鋭のメディアによって前線と銃後の距離感が大きく変容し、戦争の意味が社会で内在的に問われるようになったという意味でも現代的な総力戦の先駆であった。

アンティータム国立墓地は南北戦争の 5 年後、メリーランドほか Union の諸州によって作られ、1878 年に陸軍省に、1933 年に国立公園局に移管されている。ここには 417 体の Union の兵士が埋葬されているが、そのうちの 3 分の 1 以上は身元が特定されていない。南北戦争後の戦争のヴェテラン 261 名も埋葬され、1953 年で新規の埋葬は終了した。

墓地の中央には、SEPTEMBER 17 1862 そして、NOT FOR THEMSELVES BUT FOR THEIR COUNTRY と刻まれた追悼碑が建ち、周囲四辺にはアーリン

トンなどと同型の、幅約 10 インチから 13 インチ、厚さ約 4 インチ（大きさの違いは、墓標作成の時期の違いによると思われる）高さ 20 インチ弱の標準的な墓標が中央を向いて直線的に配置されている。中には、ゲティスバーグで見た番号だけの四角柱の墓標もある。

ここも、道路を挟んだ向かいには、民間のマウンテンビュー墓地がある。こちらにも国立墓地と同じ墓標を見つけることができるが、配列は規則的なものではない。門には 1883 と記されているが、墓標にはそれ以前の没年を記したものもある。

11

最後にアーリントン国立墓地をもう一度見ておこう。

ゲティスバーグもアンティータムも、もともと、戦場であり、戦場での死者を戦場に埋葬したのが、その起源であるが、アーリントンは事情がやや異なる。ここはもちろん、ワシントン攻防戦の戦場に近いとも言えるが、ここが国立墓地になった理由としては、ここがもともと南軍のロバート・リー将軍家所有のプランテーションであったという事情がある（厳密に言えば、ジョージ・ワシントンの家系に連なるリー夫人の所有）。戦端が開かれると、ポトマック川を挟んで首都ワシントンに臨む高台にあって首都防衛の重要拠点となると思われたこの土地は、直ちに北軍が占拠するところになる。連邦側は、この土地にかかる税金をリー家側が払わなかったとし、この土地を接収するのである（この土地の所有権をめぐるのは、南北戦争後までリー家と連邦との間で訴訟が続く）。かつて優雅なプランテーションであったこの土地には多くの将校・兵士が駐屯し、担ぎ込まれた負傷者・病人は死亡すると、かつての農場・庭園に埋葬されることになった。リー将軍の領地をこのように扱うことになるのには、ここを指揮していた Montgomery Meigs 将軍のリーに対する敵愾心も関係していたようである。

かつてのリー邸であったアーリントンハウスは、現在一般に公開されていて、そこでは南北戦争前の生活ぶりに浸ることもできるが、ここは、今日でも、週5日、平均して一日20件以上の埋葬が続いている墓地であって、歴史的な観光地というよりは、現在性が著しく強い⁽³³⁾。軍服姿の訪問者も多く、また、全体に軍人・兵士の監督下にあるため、墓地内に漂う緊張感は、上で見てきたような国立公園とは比べものにならない。

12

では、NeffとFaustによる新しい南北戦争研究を手がかりにして、南北戦争がアメリカ社会、アメリカ国家にとって持った意味について考えてみることにしよう。これらの研究は、従来の南北戦争研究において注目されなかった社会的な慣習などに着目している点に、重要な特徴がある。それは、例えば、「奴隷解放を目指したリンカンが、奴隷制を死守しようとした南部と戦った」とする政治的ストーリー、あるいは、「産業化を進めようとする新興の北部経済が、輸出志向・自由貿易志向の強かった南部経済を自己の市場に組み込もうとした戦いであった」とする経済的ストーリーでは、浮かびあがってこない側面に光を当てるものである。これらの研究の出現は、日本におけるアナル学派の社会史ブームが1980年代であったことからすれば、時期がずれているようにも思えるが、それ以前の政治・経済を中心とする歴史観と対抗的、あるいは補完的な像を描き出そうとしている特徴からして、社会史研究という位置づけが可能である⁽³⁴⁾。

13

まず、それまでアメリカ社会は、これほど大きな戦争を経験したことがなかつ

たという単純な事実の重大さに留意しなければならない。南北戦争の死者は南北併せて62万人、しばしば言われるように、アメリカが経験したそれ以外のどの戦争の死者よりも多い。当時のアメリカの人口は約3400万人であるから、人口1万人あたり死者181人の高率である。第二次大戦でも40万人の死者を出しているが、当時の人口は1億3600万人であり、人口1万人あたり30人弱にとどまる⁽³⁵⁾。南北戦争は、勃発時これほど長期・大規模な戦争になると予想していた者はなかったはずだが、結局、史上最初の総力戦となった。産業化の結果生まれた最新兵器と、それに十分対応していない兵、古典的な用兵というアンバランス、戦闘の未熟さが死者の多さをもたらした面もある。キリスト教信仰のために、敵に直面しても銃を用いなかった兵も多かったという推定もある⁽³⁶⁾。このように大量の死者が生まれたという点で、当然、南北戦争がアメリカ社会に残したインパクトの大きさは理解できる。従軍することのなかった者でも、その周囲にこの戦争に何らかに関係を持った者が一人もいないという人間は少なかったであろう。

それまでこのような大規模な戦争を知らなかったということは、アメリカはこれ以前戦いのモデル、「語り」を持たなかったということでもある。南北戦争において、戦士としての振るまいのモデルとして、「インディアン」が想起されることになり、Indian War Danceをまねたり、そのフェイスペインティングを施したりして戦いに臨んだ者があったという指摘がある⁽³⁷⁾。これは、それまでのアメリカ社会が、自前の戦士の物語を持ち合わせていなかったことを示すものでもあろう。

そして戦後には、南北戦争がアメリカ唯一の武勲の物語となる⁽³⁸⁾。この「語り」はアメリカ人のナショナル・アイデンティティの形成にとっても重要な役割を果たした。1961年からの南北戦争100周年記念事業について、記念事業委員会は、南北戦争で戦った人々の功績に焦点を合わせて事業を行なったことは正当であったと総括し、「勇敢かつ勇気ある行動はすべてのアメリカ人がも

つ特徴的資質である」とし、「自分の信念のために進んで死ぬことは「アメリカ人の性格」に備わったもので、しかも将来にわたって国家を永続させるうえで必要な資質である」と述べている⁽³⁹⁾。

南北戦争は、アメリカ人が最も関心を向ける歴史上の主題であると言われ、実際南北戦争物の書物は、今でも新刊が途絶えない。南北戦争の「リサーチガイド」もいくつも刊行されているが、これを開くと、南北戦争にまつわる骨董の見分け方の指南とともに、Civil War Genealogy と称して、自分の先祖が南北戦争にどのように関わったかを明らかにするための調査法が紹介されているのを見ることができる⁽⁴⁰⁾。すなわち、ある種のアメリカー人にとっては、南北戦争の「語り」の模索とは、自分の先祖の姿をこの国家的イヴェントの中に見出そうとする試みであり、自分のアイデンティティをアメリカの歴史の中に位置づけようとする試みであることが理解されるのである⁽⁴¹⁾。

14

南北戦争の「語り」の生成にとって重要な事情として、Neff と Faust がともに注目する Deathbed という当時のアメリカ社会の慣習について紹介しておく⁽⁴²⁾。

南北戦争前の標準的なアメリカ社会においては、死は家のベッドで、家族・友人に見守られて迎えるべきものであった。そこにおいていかなる死を死ぬかが、その人間が死後救いの途に向かえるのか否かを示す決定的に重要な標識と考えられていたのである。死にゆく者が縁者に残す最期の言葉がどれほど幸福感に満ちたものであるか、すなわちそれが Good Death「良き死」であるかどうか注視されていた。

ところが南北戦争での死者は、本来の家、あるべき Deathbed からかけ離れたところで死を迎えることになった。縁者たちは、死者が「良き死」を迎える

ことができたのか、救済の途に進むことができたのか、大きな懸念にとらわれることになる。このため、遺体を家まで運び、あるべきはずだった Deathbed の姿を擬似的にやり直そうという試みがなされる。そのために発達するのが、エンバーミングの技術であった⁽⁴³⁾。

また、死んだ、あるいは、死にゆく兵士・将校の近親者も、多数、戦場や戦場付近の病院に駆けつけた⁽⁴⁴⁾。医療水準の低さから、怪我・病気によって病院で死を迎える者も多かった（Neff は死者の3分の2が病死とする）のであり、医師が、患者に余命のないことを認めて、親族を呼び寄せたり、最後の手紙を書かせたりする例も見られた⁽⁴⁵⁾。縁者たちは、彼の死が「良き死」であったかどうかに関心を向けた。そして、やがて、彼の死が、勇敢な死、正義のための死であったなら、それが「良き死」であり、救済への道を確認するものであると信じられるようになる。

このような角度から、南北戦争における「死」、そして、その死をもたらしした戦いのあり方に対する関心が形成され、そこから南北戦争についての「語り」のパターンが生まれることになる。

15

それでは、国立墓地の形成過程を見ながら、南北戦争における「語り」の特徴を考えていくことにしよう⁽⁴⁶⁾。

南北戦争に際して国立墓地が設けられたのは、まず物理的な必要があったからである。それはかつてなかった大量の死体の処理の必要性である。アメリカでは土葬を原則としているから死体の処理は迅速に行なわれるべき必要があった。それ故、戦場、また収容された病院の近くにそのまま埋葬されることが多くなった⁽⁴⁷⁾。それ以前から、戦死者は、その戦死した土地に埋葬するという慣行はあったようである⁽⁴⁸⁾。ただし、南北戦争に際しては、故郷から遠く離れた

土地で死んだ兵士を郷里で埋葬したいとして遺体を運ぶ例が多く見られたことについては、先に触れた。

戦争中に埋葬されたということは、まず、南北それぞれが自軍の死者を埋葬したということである。死者への友情・同胞愛や葬礼としてというだけでなく、敵方に自軍の損耗を気取られないためには、死者数を把握されないようにする必要もあったのである。戦闘中、死者を回収するために、一時的に双方が攻撃を休めるという慣行もあったことが知られる。しかし、両軍の陣域は戦闘の結果絶えず変動するから、自陣に敵方の死者が残されることも多く、その場合は、敵方の死者を埋葬するという例も珍しくはなかった。敵方の負傷者を捕虜として収容する場合があるのは言うまでもない。また、放置された死体を民間人が埋葬する例も少なくなかった（戦闘が終わったので家に帰ってみたら家の中に知らない死者が転がっていたというエピソードも多い）。

ただ、当然敵方の死者に対しては、味方に対するほど丁寧な扱いができたとは限らない。死者の衣類・所持品を奪うようなことも見られ、そのようにして放置された自軍の死者を見出して、敵方に対する怒り・憎悪を募らせることもあったという。

このように戦死者は戦場で急いで埋葬されたものであるから、北軍の墓と南軍の墓は混在していた。また、応急的に埋葬されたから粗末な墓標が付されただけのもの、その墓標が読めなくなってしまったもの、あるいはそもそも墓標すらないものもあった。このような中で、1862年7月17日、連邦議会は国立墓地のために用地を買収する権限を大統領に与える立法を行なう。この時期における national cemetery という命名は、当然、政治的正統性の主張を含意している。戦場は、北はニューヨークから南はフロリダまで、西はオクラホマ・テキサスまで、特に南部に広く広がっており、戦死者たちもその土地の至るところに埋められていたから、それを一つ一つ探し確認して、国立墓地に集めるといった作業が地道に進められることになった。ここには、敵地に葬られたままで

は、死者にどんな侮辱が加えられるか知れないという懸念もあった。また、従軍者の中には、民主主義思想の進展からか、士官もその率いた兵とともに葬られたいという新しい考え方を示す者も出、これが一律同様の墓標による国立墓地システムを準備するものとなった⁽⁴⁹⁾。

戦後になると、退役軍人たちが、相応の尊敬の対象となるような墓地整備をせよと強く要求し、この改葬・整備は進められることになる⁽⁵⁰⁾。当初は戦場での戦死者、戦病死者、捕虜として死んだ者しか、国立墓地には入れなかったが、退役軍人たちの要望から、やがて、彼らも戦死者とともに墓を持てるようになる。ここにおいて国立墓地は、「国のために死んだ者」の墓から「国のために戦った者」の墓となり、「死んだ」ことより「戦った」ことを顕賞する場に変わったと言えよう。このような経緯からして、これら国立墓地の「国立」Nationalとは、「北軍の」「Unionの」という意味しかなく、そこからは南軍の死者は排除されていた。

先に述べたように、国立墓地の成立自体はヨーロッパに先行しているが、この整備に当たっては、ヨーロッパの、例えば、ギリシアやフランスで nation のための死者に与えられる尊敬に倣えという声が上がっていた⁽⁵¹⁾。

この時期、南部では、北部によって占領・改革が進められていた。この占領は1877年まで続く。南部からすれば、この戦争は自分たちの states のための戦いであったが、北部からすれば、それは、国家 United States of America への反逆であった。リンカンは何より南北の融和を志向していたと言われ⁽⁵²⁾、また、彼を引き継いだジョンソン大統領も、「叛乱」に加わった者の恩赦を謳うが、再統一過程においては、懲罰的な処遇が多く、また、憲法への再忠誠が問われることになった（南部諸州には、州憲法制定会議を開かせ、連邦離脱を無効とし、修正第13条を批准させ、奴隷制度を廃止させた）。この時期の懲罰的な処置には、南北戦争中に南軍の兵士が、北軍の死者に対して残虐な振る舞いに及んだ恨みが反映しているという指摘もある⁽⁵³⁾。

言うまでもなく、戦死者は北軍より南軍の方に多かったわけであるが、北部占領下であって戦死者追悼の行事を大々的に行なうことは、南部の政治家・(旧)軍人にはできにくかった。そのような状況の中で、南部では、女性が戦死者の埋葬に役割を果たすようになり、また、彼女らによって南軍兵士の墓に花を手向けるという習慣がはじまったと言われる。これは当初、デコレーションデイと呼ばれ、後のメモリアルデイの原型となったと考えられているものである⁽⁵⁴⁾。彼女らは、死者たちがその義務に忠実であったことを称えた⁽⁵⁵⁾。

16

1870年10月12日にリーが死ぬと、リーを顕彰し南部の大義を考え直そうという動きが出てくる。北側もそれまで自由を市民権や選挙権の行使などまで含むように広く定義して、南部にそれ以前の政治体制の大規模な変更を促していたが、リーの死後、南部側の狭い解釈を受け入れるようになっていく⁽⁵⁶⁾。

そして、戦後南北の和解に尽くしたリーというイメージが、南北双方の必要から生まれてくる。これに関連して、Neffが挙げている例の中で、この時期*Century Magazine* から出た”Battles and Leaders”という戦記録のシリーズが興味深い。これは、北軍・南軍がいかなる戦略・兵站・戦術で戦ったかを、それぞれの立場から描こうとするものだった。公刊にあたっては、「北軍側と南軍側が、相互に尊敬しあえるよう手助けすることを目指す」と述べられていた⁽⁵⁷⁾。確かにお互いがそれぞれに死力を尽くして戦ったことが理解されると、当事者間には、全力を尽くした者同士特有の敬意のようなものが生まれることもある。

1870年代の半ばにシンシナチのメモリアルデイでは、南部人が北部人に加わって墓地に花を手向けようになった⁽⁵⁸⁾。

1877年、再建期という北部による占領が終了し、南部では占領以前の権力構造が回復していく。南部の経済も北部と密接な関係を持つようになる。ジェ

ファーソン・デーヴィスが1889年に死ぬと、Confederate それ自体もまた、死んだと受け止められるようになる。

1898年に米西戦争が起きると、若い世代の人々は、北部人も南部人もマッキンレー大統領の呼びかけに応え、多く従軍する。その結果、南部出身者も晴れて、(その親の世代を飛び越えて)USAの死者として国立墓地への埋葬が認められることになる。そして、1899年、マッキンレー政権で、ワシントンのあちこちの墓地から Confederate の遺体が集められ、アーリントンに改葬されるようになる⁽⁵⁹⁾。

17

20世紀に入ると、reunion はいっそう進む。1900年までに国立墓地システムは進展し、83の墓地ができており、そのうち、23の墓地には、Confederate の区画か、南軍兵士の墓所が設けられていた。そして、1900年6月に議会は、国民的和解のため、アーリントン国立墓地に Confederate のための区画を設けることを決める。1901年の終わりまでには、ヴァージニア州アレクサンドリア国立墓地とワシントン Soldiers' Home に埋葬されていたすべての Confederate の死者が、アーリントンの Confederate Section に改葬された。埋葬された482体のうちわけは、士官46、召集兵351、妻58、civilian15、unknown が12だった。これらの南部の人々を称えるため、United Daughters of the Confederacy が追悼碑の建設を要請、これを1906年3月4日陸軍省長官ウィリアム・ハワード・タフトが承認、1912年12月12日にその礎石が置かれる。そして、1914年6月4日、ウィルソン大統領は、このアーリントン国立墓地の第16区画の Confederate Monument 除幕式に出席し、南北の融和を謳う⁽⁶⁰⁾。

この第16区画では、中央の追悼碑に向かって同心円状に墓碑が配置されている。これは、他の区画の墓碑が一律に同じ方角を向いて置かれている(例えば、

この第16区画とは通路を挟んだ向かいの第22区画、第23区画の墓標は、みな、東つまりワシントン方向を向いている)のとは比べると、際だった違いがある。

ここでの墓標は没年月日が記されていないものが大部分である。そのように確定できない状況で埋葬されていた遺体を、追悼碑の建設にあわせてここにまとめて改葬したと考えられる。また、ここには、南北戦争終結後何年もたって死んだ者も同じように埋葬されている。Confederate Memorial 直下の三つの墓は、それぞれ1922年、1924年、1927年に死去した者の墓である。南北戦争に従軍した彼らは、そのときに至っても、Confederate だったわけである。

このCSAすなわち、Confederate States of Americaの死者の墓標は、USAの死者たちの墓標とは形状が異なる。第16区画でのCSAの死者の墓標は、幅約12インチ、厚さ約4インチで、これはその周囲の区画のUSAの死者の墓標と大差がない(素材も同じであるように見える)が、他の墓標は上辺がカーブをなしている(rounded on top)のに対して、CSAのものだけは三角形(angular top)になっていて、違いは一目瞭然である⁽⁶¹⁾。また、その宗派を示すシンボルが刻まれるべき場所には、CSAのシンボルが刻まれている⁽⁶²⁾。

18

米西戦争や第一次大戦の従軍者は、戦死者はもちろん退役軍人も、いまや、南部・北部の区別なく、USAの戦死者として国立墓地に埋葬されるようになる。だが、南北戦争のヴェテランたちは1930年代になっても区別され続けていた。Confederateのヴェテランは死んでも国立墓地に当然に埋葬される資格はないとする1911年の国立墓地規定は依然有効であり、特定の条件の下で、アーリントンの第16区画に埋葬され得ただけだった。

Neffは、死者とともにある記憶、感情は容易に消し去ることができるものではないと強調する⁽⁶³⁾。これは、北軍における、つまり、USAにおける戦死者

顕彰の「語り」が、Confederateには共有できないものを含んでいたからである。

北軍は、「自由」のために奴隷制度という「悪」を倒すために戦ったとされ、戦勝はその悪の打倒として言祝がれ、国立墓地にあっては、戦死者たちはその悪を倒しアメリカに「新しい自由」をもたらしたという功績によって最大に顕彰された⁽⁶⁴⁾。このような「語り」が正統な公共的記憶として成り立っている状況では、その「悪」の側の死者たち、自由の抑圧の側に立った死者たちを、同じ論理によって顕彰することは不可能である。

それでは、国立墓地への改葬において、彼らの死はどのような「語り」によって顕彰されたのであろうか。このような「語り」の変容過程をNeffは、特に教会での説教を収集して提示する⁽⁶⁵⁾。とりわけリーの死後に現れてくるのは、彼らもまた、patriotとして他者のために命を捧げたという行為の点からの顕彰の「語り」である。このような「行為」それ自体の純粹性という論理によって、南軍の死者も北軍の死者も同じく愛国者として顕彰する途が開かれる。

しかし、このような「語り」の設定は、「戦争目的」という観点を不問に付すものであり、南部において、南北戦争は祖国のための正当な戦争であったという位置づけを許すことになる。これは、今日でも重要な政治的争点を招くことにもなっている（Lost Cause 論争）⁽⁶⁶⁾。

現在、メモリアルデイは、夏のヴァカンスシーズン到来を告げる国の祝日となっているが、かつてのConfederate諸州には、今でも、それとは独自の南北戦争追悼日を持っているものがある。アラバマ、フロリダ、ジョージア、ミシシッピにおいては、4月26日または4月の第4月曜日で、これは、1865年にJohnston将軍がSherman将軍に降伏した日である。アーカンソーではリー将軍の誕生日である1月最初の月曜日、ケンタッキー、ルイジアナ、テネシーは、ジェファーソン・デーヴィスの誕生日6月3日、ノースカロライナとサウスカロライナは、5月10日、1863年ストーンウォール・ジャクソン将軍が死に、1865年にジェファーソン・デーヴィスがとらえられた日である。テキサスは、

1月19日を、リー将軍とジェファーソン・デーヴィス二人の誕生日を併せて Confederate Hero Day と呼び、4月26日を Confederate Memorial Day としている。このように南北戦争の「語り」は、今日でも、南北再統一を果たしているわけではない。

19

かつて、リー将軍は、ヴァージニアが自己の生地であるからヴァージニア軍に身を投じ、そのヴァージニアが CSA の側についたために連邦と戦う途に進むことになった。すなわち、このときの彼においては、USA は自らの死を捧ぐべき patria としては選ばれなかったのである。

彼は、1861年4月20日に、妹に宛てた手紙に、自分は、native state を守るために、連邦軍を辞すると書いている⁽⁶⁷⁾。元来、native とは「生得の」「生まれの」ということであり、nation も「生まれ」から来ている。他方、patria とは父祖の地ということである。patria への献身が求められたのは、それが所領であったからである。そして、相続が「生まれ」と結びついているが故に、patria は nation と必然的に連続する。古代社会にあって、国家とその軍力は、まず、相続された土地所有の権利関係を承認し、対外的に守るためにこそあった⁽⁶⁸⁾。リー一族の所領であったアーリントンが、南北戦争における分裂とその後の再統合の焦点になるのは、極めて象徴的である。

20

20世紀に入ってアーリントンで Confederate Memorial が完成したとき、対岸のワシントンでは、Lincoln Memorial の建設が進められていた。アメリカにおける reunion のシンボルとなったのは、リンカンであった⁽⁶⁹⁾。

ベラーは、憲法とは、回心とそれに続く宗教的な契約によって定められるものであると言う。彼によれば、当初のアメリカ憲法は、道徳的な内容に立ち至らない形式的なものであったが、19世紀初頭の宗教的大覚醒運動を経て、南北戦争後の修正条項の成立を見て、道徳的な内実を持ち得るに至ったとされる⁽⁷⁰⁾。このような憲法の「内実化」を生み出すには、リンカンの暗殺に直面して、その死の意義づけを、南北戦争での大量の死者の死の意義づけとつなげて求めようとする当時のアメリカ国民の強い希求があったのではないだろうか。

1865年4月9日、リー將軍降伏の知らせがワシントンに届く。それはイースターの前、棕櫚の聖日の日曜日のことである。リンカンがフォード劇場で撃たれるのは4月14日の金曜日、息を引き取ったのは、翌15日の朝7時22分であった。この死の日付の暗合から、リンカンの死をイエスに重ねて理解しようとする国民が多く現れるのは当然の成り行きでもあった。

リンカンが最終的にスプリングフィールドに埋葬されたのは、5月4日である。遺骸はワシントンから12日間1654マイルの旅をし、この間、棺は、ワシントンの議事堂、ボルチモア、ハリスバーグ、フィラデルフィア、ニューヨーク、アルバニー、バッファロー、クリーヴランド、コロンバス、インディアナポリス、シカゴ、そして、スプリングフィールドで、国民の前に開かれた⁽⁷¹⁾。それは、広く報じられたリンカンのDeathbedの様を国民が追体験する場でもあった⁽⁷²⁾。

だが、リンカンが狂信的南部支持者に暗殺されたことは、イエスとの対比においてどのように解釈できたのか。リンカンの死によってnationとしてのアメリカが復活するとした見方もあった。しかし、リンカンは誰の罪の身代わりになったのか、それによって何が許されたのかという解釈の点では、南北のそれぞれの立場からは受け止め方はまったく異なっただろう⁽⁷³⁾。

南北統一の論理という点に関しては、むしろ、暗殺されたリンカンをめぐる「語り」の中で、彼をモーゼになぞらえる論が現れていることが注目される⁽⁷⁴⁾。

ゲティスバーグ演説でリンカンは、このアメリカの土地が戦死者たちによって聖別されたとする。つまり、彼らの死によってアメリカの土地は不可分・不可譲のものとなったということになる⁽⁷⁵⁾。そして、リンカンは、生き残った者に課された責務、「この国に自由の新たな誕生をもたらすこと」を告げる。約束された一体不可分の永遠の土地アメリカ、そして、すべてのアメリカ人民に自由のための責務を明らかにした聖典としてのゲティスバーグ演説というイメージは確かにモーゼの像と重なり合うところがある。この短い演説は、全文がリンカン記念堂の内壁に刻み込まれている。

このような再統合過程においては、敗者も同胞であって、正義の名の下に一方的に否定・抹消すべき対象ではなくなる。彼らもまた、同じ祖国、同じ「からだ」の一部、但し、矯正されなければならない一部である⁽⁷⁶⁾。このような関係においては、勝者は、邪悪な敵を殺したことを根拠に顕彰を受けることはできない。逆に、敗者もまた自らの使命のために誇りを持って戦った勇敢な兵士であることを認め、それに正々堂々と勝ったことからこそ顕彰されるのである。これが勝者と敗者を辛うじてつなぎとめる唯一の論理の回路であった。しかし、正義のために戦ったと思う勝者からも、自らにこそ大義があったと思う敗者からも、不満・不服が容易に消えることはない。

ベラーは、南北戦争によって南部にはぬぐい去れない挫折意識が長く残存しており、それは、二つの対照的な方策で和らげられてきたと言う。「一つは「失われた大義」を感傷化し栄光化することである。もう一つは、攻撃者と自己同一化することであり、「この同一化によって、南部人はアメリカ帝国主義の最も愛国的かつ軍国主義的な支持者となった」⁽⁷⁷⁾。

21

バラク・オバマは、大統領選の中で、イラク戦争に反対すると強調しながら、

イラク戦争で戦死した米兵については「誇りに思う」と語っている。これは南北戦争後において、南軍の戦死者を reunite しようとしたときにとられた論と同じ「語り」である。このように南北戦争に由来する「語り」のパターンは、今日のアメリカ政治においても反復されている。

ここには、祖国のために戦って死んだ者は、その献身の行為によって最も尊敬されるべきものであり、当然に顕彰されるべきであるという発想（を否定することはできないという政治的判断）がある。公共性は、構成メンバーによる何らかの献身によって支えられるものであり、その献身の最大のものが、その命の提供だからである。だが、Lost Cause 論争が示すように、戦死者たちの行為の純粹さを顕彰しようという論理は、往々、彼らを動員した戦争自体の顕彰にもつながる。

敵対する当事者のどちらが善でどちらが悪かということをおうとしているのではない。南部にとっては、リンカンが自由の侵害者であって南部の側こそ憲法上の権利の擁護者だったのである。そのどちらの論がより妥当かという問題と、どちらが戦勝したかという問題は、本来はまったく別次元の問題である。しかし、多くの有為の若者たちを死に追いやった以上、生き残った者は、常に、彼らの死に何らかの意義づけを与えることを余儀なくされる。勝者は、その獲得した勝利という点から死者を顕彰することが容易であるが、敗者にはそれができない。敗者における戦死者の死の意義づけのあり方に注目する所以である⁽⁷⁸⁾。

むしろ、ひとつの nation における戦いの「語り」が一通りであるはずはなく、論理的には必ずしも整合的でないいくつかの「語り」のパターンが併存し、状況や文脈に応じて、そのいずれかが（時には他の「語り」との間に鋭い緊張を引き起こしつつ）強く表れるということもあろう。だが、ある nation をそのものとして成り立たせる核には、そのような「語り」によって再生産され、またその「語り」を再生産するところの公共的記憶が存在するのではないか。国家の対

外的な軍事行動の正当化の論理に見られる反復は、そのような公共的記憶がある種の政治行動のパターンを規定する要因として機能しているのではないかと考えさせるのである。

アーリントンには今日でも墓地の拡張計画があるが、そこには、「戦争自体が悪である」というような発想は微塵もない。これと対比したとき、戦後日本における戦争の「語り」はいかなる特徴を持ち、いかなる政治現象を帰結したと考えられるか⁽⁷⁹⁾。本研究が完了したなら、進まねばならぬ次なる研究課題として浮かびあがってくるのは、それである。

※ 本稿は、2009年度から二年間の予定でカリフォルニア大学バークレー校で取り組んでいる在外研究の成果を、中間報告としてまとめたものである。今の時点では、研究上の備忘録という体にとどまり、はなはだ遺憾ではあるが、その意を汲んで頂けるものと信じてこの論集に呈上する。

なお、この研究にあたっては、2007-2008年度に法律科学研究所で組織された共同研究「東アジアの戦後」の成果を利用し、また、2009年度の共同研究「21世紀東アジアの政治危機」プロジェクトからも支援を受けた。付記して関係各位に謝意を表する。

注

- (1) Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, revised ed., Verso, 2006, pp. 9-10. イタリックは原文のまま。本書には日本語訳があるが、本稿執筆においては参照できなかった。
- (2) 2010年には、バイデン副大統領が列席して勤めを果たした。
当日、オバマ大統領は、シカゴ近郊のアブラハム・リンカン国立墓地での式典に臨んだが、激しい風雨に見舞われ、予定していた演説を果たすことができなかった。なお、オバマも、2009年には、アーリントンのセレモニーに列席している。
- (3) アリエスも、“C'est en Amérique, à Washington, plus encore qu'au Panthéon de Paris, que nous trouvons les premières manifestations impressionnantes du culte funéraire du héros national.”と述べている。Philippe Ariès, *Essais sur l'histoire de la mort en Occident: du Moyen Age à nos jours*, Éditions du Seuil, 1975, p. 63.

アーリントン国立墓地については、Robert M. Poole, *On Hallowed Ground: The History of Arlington National Cemetery*, Walker & Company, 2009 年⁸⁾、墓地一個の歴史

の概観というにとどまらず、アーリントンという観点からのアメリカ史全体への展望まで与えてくれるものとなっている。また、詳しいガイドとしては、James Edward Peters, *Arlington National Cemetery: Shrine to America's Heroes*, 3rd ed, Woodbine House, 2008 がある。

- (4) Poole, p. 285.
- (5) 第 64 区画には、「9.11 テロ」によってペンタゴンで死去した 125 人の軍人と軍属、突っ込んだ飛行機に乗っていた 64 人の人々に捧げられた追悼碑が設けられており、ここには、身元を特定できない遺体も埋葬されている。これは、上の原則からは例外にあたる。ペンタゴンでの軍人・軍属の死者であっても、アーリントン以外に葬られた者も当然あり、アーリントンに埋葬されたのは、Peters の著書の時点では、64 人とどまる。Peters, pp. 270-271.
- (6) 当時、ここには、解放奴隷も多く住んでいて、その死者が葬られることも多かったからである。彼らは、当初、南、現在の区画で言うと、第 8、25、47 区画のあたりに住んでいて、そこに葬られたが、現在では、北の端にあたる第 27 区画に墓所がある。
- (7) 画一的とは言っても、時期によって大きさと墓面の形式に幾分違いがある。
- (8) 残された者たち（多くは親族であろう）がいかにか死者を褒め称えようとしたか、その努力の大仰さの羅列は、今日では滑稽を通り越して悲哀すら感じさせるが、私の見た限りで、アーリントン中で、最も劇的な効果を生んでいるのは、白い小さな十字架を一つ立てただけのロバート・ケネディの墓である（ただし、2009 年に死去したエドワードも同じ意匠を用いたため、その効果は変化したように思われる）。
- (9) 墓標に、その宗教を示すシンボルが彫られている。Peters, pp. 325-326.
- (10) 妻子の名前が併せて彫られた墓標も珍しくはないが（また、一般の墓地でも、姓を同じくする者たちの墓が集まっている場所を見ることが出来るが）、それらは「家」の墓ではない。「家」単位の墓とは、その系に連なる生者たちによる儀式的場とすることを当然に予定したものであり（単純には、その墓にその系に連なる者がいずれ埋葬されるであろうこと、つまりは、同じ場所における埋葬儀礼の反復が予定されている）、特定の宗教的観念を前提にしている（むろん、反面、個人を一人ずつ、名を明らかにして埋葬するのも、個人単位での死後の復活を想定する信仰によるものだと言えなくはないかもしれない）。

日本における墓参は、死者の「霊」を慰撫してその「霊力」による加護を受けようという期待、つまり死者が死後も生前のアイデンティティを保ちつつ現世の諸事象に超越的に影響を及ぼし得るとする想定、そして、そこに「参る」ことでその死者の霊力行使を何らかにコントロールできるとする想定を含んでいることも多く、また、特定の日に特定の家系関係者による開催が期待される儀式が中核

を占めている点で、人間が死後いかなるものとなるかについての特定の思念を前提に含んでおり、単純な追悼行事とは言えない。

また、日本におけるこのような墓参の習慣を仏教的儀式と考える者は今日でも多いが、インド古来の仏教は、死後の輪廻転生を前提しているから、死体は本来尊重の対象とはならない。墓や位牌と墓参を重視する日本の儀礼は、東アジアの儒教の信仰の伝統によるものだと、かねてから加地伸行が強調してきたところである。加地『儒教とは何か』中公新書、1990年など。

- (11) 円形劇場内のメモリアルデイの追悼行事は、Parade of Colors という行進から始まる。これは式典後に「無名戦士の墓」に献花を予定している団体の旗手が、その旗を掲げて劇場内にまず入場するという儀式である。様々な単位で組織されているヴェテランの団体がここに登場する。中心を占めるのは、Veterans of Foreign Wars of United States (VFW) という組織である。南北戦争当時の衣装をつけた Sons of Union Veterans of Civil War という団体もある。アジア系では、太極旗入りの旗を掲げた Korean War Veterans Association という団体もある。最も人目を引くのは、複数のネイティヴ・アメリカンの団体で、彼らは羽根飾りを頭にかぶり、「無名戦士の墓」への献花に際しては、民族楽器と覚しき太鼓を叩きながら行進した。このような儀式は、異なる民族が戦争によって（より直截に言えば、戦争において同じく死ぬことで）一つになるという観念がアメリカを支えているということ、イメージとして現出するものである。
- (12) ちなみに現在メモリアルデイの行事が行なわれる円形劇場（1920年5月献堂）の北側に旧円形劇場（1868年5月30日のメモリアルデイに献堂）があり、その脇には、1866年建設の Unknown Civil War Dead の墓がある。ここには、2111の「無名戦士」が葬られている。

南北戦争では、すべての戦死者のうち、42.5%が名前もいまま墓に入った。これは、軍当局がこれほどたくさん的人数が戦場で死ぬことを想定していなかったことにもよる。やがて、認識票 (dog tag) が開発されて、無名戦死者の数は大幅に減少する。Poole, p. 111.
- (13) Poole, ch.13, "The last unknown".
- (14) メモリアルデイの円形劇場での追悼行事においてアメリカ国歌が斉唱されるとき、劇場内には、列席者全員によって注目されるべき単一の国旗の掲揚はない。国旗が掲げられていないというのではない。そうではなくて、劇場内には無数のアメリカ国旗が掲げられているので、列席者は思い思いにそのうちのどれかの国旗を見つめればよいのである。omnipresent な何ものかを象徴しているように思われ、印象的であった。
- (15) 集合的記憶・公共的記憶について、古典的な業績と代表的な研究としては以下

のようなものがある。Maurice Halbwachs, *The Collective Memory*, tr. Francis J. Ditter Jr. and Vida Yazdi Ditter, Harper Colophon Books, 1980; *On Collective Memory*, ed. and tr. Lewis A. Coser, The University of Chicago Press, 1992; Paul Connerton, *How Societies Remember*, Cambridge University Press, 1989; James Fentress and Chris Wickham, *Social Memory*, Blackwell, 1992. Halbwachs の二著については、フランス語の原著は参照できなかった。

- (16) Eric Hobsbawm and Terence Ranger eds, *The Invention of Tradition*, Cambridge University Press, 1983. 本書にも日本語訳があるが、本稿執筆に際しては参照できなかった。

- (17) エルンスト・カントロヴィッチ『王の二つの身体』(小林公訳)筑摩書房、1993年、『祖国のために死ぬこと』(甚野尚志訳)みすず書房、2006年。カントロヴィッチの高度にテクニカルなタムからなる叙述の理解のためには、これらの翻訳に裨益されるところの大きかったことを記して感謝したい。

また、マックス・ウェーバーは、ロシア革命を論じる中で、「神の国」=「キリストの体」=「人の子の体」「人間共同体」とし、体とはすなわち救済の対象たる人類の肉、と述べている。キリスト教の「からだ」論が介在することで、「祖国」は忠誠の対象(というだけ)ではなく、(不断の)矯正・克服の対象となったとも言えるのではないだろうか。ウェーバー『ロシア革命論 I』(雀部幸隆・小島定訳)名古屋大学出版会、1997年、209-210頁。

- (18) 公的福祉制度が多く戦争を契機として成立したことは言うまでもない。
- (19) 社会史的な南北戦争研究の中ではメモリアルデイへの言及を多く見つけることができるが、メモリアルデイそれ自体を対象とした研究は、未だ多くはないようである。Richard P. Harmond and Thomas J. Curren, *A History of Memorial Day: Unity, Discord and the Pursuit of Happiness*, Peter Lang, 2002 は、新聞を丹念にたどって、メモリアルデイがアメリカ人にとっていかなるものであったかを、歴史的に描こうとした例外的なものである。

- (20) John R. Neff, *Honoring Civil War Dead: Commemoration and the Problem of Reconciliation*, The University Press of Kansas, 2005; Drew Gilpin Faust, *This Republic of Suffering: Death and the American Civil War*, Vintage Books, 2008. また、この分野では、David W. Blight, *Race and Reunion: Civil War in American Memory*, The Belknap Press of Harvard University Press, 2001 が重要なものである。

このテーマの文献としては、その他に次のようなものがある。G. Kurt Piehler, *Remembering War the American Way*, Smithsonian Books, 1995; Cecilia Elizabeth O'leary, *To Die For: The Paradox of American Patriotism*, Princeton University Press, 1999; Thomas A. Desjardin, *These Honored Dead: How the Story of Gettysburg Shaped*

American Memory, Da Capo Press, 2003; William Blair, *Cities of the Dead: Contesting the Memory the Civil War in the South, 1865-1914*, The University of North Carolina Press, 2004; Alice Fahs and Joan Waugh eds., *The Memory of the Civil War in American Culture*, The University of North Carolina Press, 2004; Susan-Mary Grant, "Patriot Graves: American National Identity and the Civil War Dead", *American Nineteenth Century History*, vol. 5, No. 3, Fall 2004, pp. 74-100; "Raising the Dead: War, Memory, and American National Identity", *Nations and Nationalism*, vol. 11, no. 4, 2005, pp. 509 - 529; "Reimagined Communities: Union Veterans and the Reconstruction of American Nationalism", *Nations and Nationalism*, vol. 14, no. 4, 2008, pp. 498-519; "Reconstructing the National Body: Masculinity, Disability and Race in the American Civil War", *Proceedings of the British Academy*, vol. 154, 2008, pp.273-317; Drew Gilpin Faust, "Battle over the Bodies; Burying and Reburying the Civil War Dead, 1865-1871" in *Wars within a War: Controversy and Conflict over the American Civil War*, eds. Joan Waugh and Gary W. Gallagher, The University of North Carolina Press, 2009.

- (21) 第一次大戦の公共的記憶を扱った研究としては、Paul Fussell, *The Great War and Modern Memory*, Oxford University Press, 1975; Jay Winter, *Sites of Memory, Sites of Mourning; The Great War in European Cultural History*, Cambridge University Press, 1995 など。日本語でも、ジョージ・L・モッセ『英霊—創られた世界大戦の記憶』（宮武実知子訳）柏書房、2002年が読める。
- (22) Michael Weeks, *The Complete Civil War Road Trip Guide*, The Countryman Press, 2009, p.355 は "you must go" と言う。
- (23) ちなみに最初の国立公園の創設は、南北戦争終結から間もない1872年、イエローストーンである。
- (24) ボドナーは、1930年代に国立公園局が史跡を選定し、愛国主義を涵養する役割を担ったと指摘している。ジョン・ボドナー『鎮魂と祝祭のアメリカ—歴史の記憶と愛国主義』（野村ほか訳）青木書店、1997年、第7章。
- (25) ゲティスバーグ国立墓地内でも、このモニュメントから少し離れた周辺部には、アーリントンなどと同型の墓標はある。それらは、南北戦争以後の戦争に関わった死者のものであり、20世紀後半のものもある。
- (26) Memorial は文字通りに訳せば、「記念碑」となるのだが、日本語の語感として「記念」は、何か慶事を対象とするものと思われ、死や死者に向けられるものとしては馴染みにくい。このような施設は、日本語では一般的には「慰霊碑」と呼ばれるが、「霊」を「慰」めるという発想が、Memorial に当然に備わっているものではないので、ここでは、追悼碑とした。
- (27) Gregory A. Coco, *Gettysburg's Confederate Dead*, Thomas Publications, 2003. Coco

による詳細なリストを見ると、中には、親族によってゲティスバーグからその郷里に運ばれたものも散見する。

- (28) ここは、1847年に創設された歴史のある墓地で、第5代大統領ジェームズ・モンロー、第10代大統領ジョン・タイラーの墓がある。本稿の文脈で特筆すべきは、Confederate States of Americaの初代にして唯一の大統領Jefferson Davisの墓があることである。デーヴィスの墓は墓地の中で南の端の最も奥まった場所にある。そこには、デーヴィスの立像（それが墓標である）やConfederateの旗の掲揚台があり、ちょっとした公園という風情である（実際、ベンチも置かれている）。

デーヴィスの墓とは反対側、墓地の北の端にはConfederate Sectionがある。そこには18000の兵士が埋葬されており、1869年に設けられたピラミッド形（と称されているがそれにしては底面に比して高さがだいぶある）の追悼碑がある。アーリントンと同型の墓標も多くあるが、国立墓地の風景とは異なって、墓標の配置に格別の規則性もなく、また、墓標自体も苔むしたり、割れたり、地面に倒れたままのものも目についた。ここには、戦時下にリッチモンド近郊での戦死者が運び込まれて作られた墓も多く、特に戦争初期の日付の入ったものには大きな墓もある。

- (29) 現在でも、ゲティスバーグからChester Rural Cemeteryまでは車で約2時間半かかる。
- (30) Chester Rural Cemeteryからフィラデルフィア国立墓地までは、車で約40分ほどである。なおこのChester Rural Cemeteryには、Crozer-Chester Medical Centerが隣接しているが、それがかつてのGen. Hospitalにあたるのかどうかは、確認していない。
- (31) Therese T. Sammartino, *Promise Made-A Commitment Kept: The Story of America's Civil War Era National Cemeteries*, Department of Veterans Affairs National Cemetery Administration, 2000, pp. 220-224.
- (32) Mathew Bradyがニューヨークで展示した「アンティータムの死者」は、戦場から遠く離れたところにいる市民に、戦場のがれきのまっただ中に立っているように感じさせたという。Neff, p. 40. See also, Faust, pp. xvi-xvii. NeffやFaustの研究は、近年進んでいる写真史研究の成果を巧みに生かしたものになっている。この点での先駆的業績には次のものがある。Timothy Sweet, *Traces of War: Poetry, Photography, and the Crisis of the Union*, The Johns Hopkins University Press, 1990.
- (33) アーリントンハウス前の星条旗は埋葬の行なわれている時間帯には半旗とされる。この地の現在性を端的に示すものである。
- (34) アナール学派のフィリップ・アリエスが書いた前掲「死の歴史」*Essais sur l'histoire de la mort en Occident*は、もともと1973年4月にJohns Hopkins大学で行なわれた集中講義であり、その立論においては、アメリカの事例が重要な位置を

占めている（そのアメリカへの言及の中心的な部分は、Jessica Mitford, *The American Way of Death*, Simon and Schuster, 1963 に依拠している）。この英語版の刊行は 1974 年（増補されたフランス語版は 1975 年）、そして、その拡大版にあたる *L'Homme devant la Mort*（1977 年）の英訳も 1981 年には出ているが、若い Neff はこれに言及しているものの、Faust には格別な言及は見られず、彼女の研究は、フランスにおける社会史研究の進展とは関わりのないところで進められたもののように思われる。ただ、Faust は、南北戦争期の（とりわけ南部における）女性史の研究から、南北戦争戦死者の扱いについての研究へと進んでいる。女性史研究が重要な社会史研究の一分野であることは言うまでもない。アリエスのアメリカでの受け止めとしては、彼自身も寄稿した次のものがある。David E. Stannard ed., *Death in America*, University of Pennsylvania Press, 1974. また南北戦争への社会史的アプローチとしては、次のようなものがある。Maris A. Vinovskis ed., *Toward a Social History of the American Civil War: Expository Essays*, Cambridge University Press, 1990. なお、アリエスの方法については、Patrick H. Hutton, *History as an Art of Memory*, University of Vermont, 1993; *Philippe Ariès and the Politics of French Cultural History*, University of Massachusetts Press, 2004.

(35) Neff, p. 21.

(36) Faust, pp. 39-40.

(37) Faust, p. 37. 今日でもアメリカにおいて戦士のモデルとしてネイティヴアメリカンが想起される例は、プロスポーツチームのニックネーム（や観客の応援スタイル）に見て取ることができる。

(38) トム・クルーズ主演の映画『ラストサムライ』は、多少なりとも日本史に知識のある人間から見れば、荒唐無稽な物語であることは今更言うまでもないが、ハリウッドの監督がその持つバイアスを示すとき、そこにアメリカ社会における戦闘のイメージを見て取ることができるのは興味深い。

終盤の戦闘シーンにおいて、平原での密集した白兵戦で兵士が銃を振り回し撃ち合う姿は、多くの日本人にとっては、戦法上あり得ない話だと思われるであろう。接近戦で銃を用いれば味方を撃つことにもなるし、銃の操作に手間取れば、たちまち相手にやられてしまうのは明らかだからである。ただ、多くの日本人がこれを「荒唐無稽」と感じるのは、接近戦ならば、銃（弓）を捨て、刀を抜き、あるいは、槍をかざして突撃する方が有効であり、それこそが勇敢な戦士のとるべき戦法であるという戦闘イメージが、源平合戦そして戦国時代以来の多くの戦いの「語り」の中で、日本人に定着しているからであることには注意されるべきである。このイメージは、例えば、第二次大戦の終盤での「竹槍」を用いた国民教育においても再生産されているし、1980 年代に日本で広く人気を博したアニ

メーション『機動戦士ガンダム』でも、残弾の少ないライフルを捨てサーベルで接近戦を挑むというパターンで反復されている（その行為は、「思い切りの良いパイロット」として敵方から賞賛されるのである）。

このようなイメージの存在が、近代日本の戦争史上多くの悲劇（それを滑稽と呼ぶ者もあるだろう）を生んできたこともまた事実であるが、ここで気がつかなければならないのは、異なる歴史を持つ他国ならばこれとは異なるその国なりの戦闘イメージがモデルとしてあるはずであるという可能性である。ゲティスバーグ国立軍事公園の博物館にあるサイクロラマで再現されている南北戦争の戦闘シーンでは、ごく至近距離での接近戦にもかかわらず銃を用いている兵士たちの姿が活写されている。この画像は、19世紀末に作成されたものを忠実に複製しており、つまり、実際の南北戦争での戦闘を反映していると言ってよい。こんなことをやっていれば、死者が多く出るのも当然だろうと思われるし、また、これら兵士たちの振る舞いは死の恐怖におびえてとり乱した結果であろうと日本人は思うのであるが、アメリカ人の南北戦争の「語り」は、このような戦闘シーンをアメリカ人にとっての標準的な戦闘イメージとして定着させ、そしてそれが勇ましい戦士たちの姿と見なされることになったのではないだろうか。そのような「常識」からすれば、銃を捨て斬りかかってくる戦士の姿こそ「狂気の沙汰」と見えるであろう（アメリカ人にとっては、最後の手段は銃剣突撃である）。日本人が「荒唐無稽」と思う『ラストサムライ』の戦闘シーンは、アメリカ人が「狂気の沙汰」と思う戦士の姿を排除したことによって成り立ったと思われるのである。

(39) ボドナー339頁による。

(40) Eg. Bertram Hawthorne Groene, *Tracing Your Civil War Ancestor*, 4th ed., John F. Blair, 2004.

(41) むろん、南北戦争後にアメリカに移住してきた人間にとっては、血縁の連続性という点では、南北戦争は当然には「自分たち」の物語ではないはずであるが、「いま」彼ら自身も得ている「自由」の起源がそこにあり、また自分たちも、「いま」生きている時間の中で彼らと同じ戦いを戦わねばならぬ使命があると自己認識させられれば、南北戦争の語りは「自分たち」の物語となるであろう。

ボドナーは南北戦争100周年記念事業について次のように述べる。「銃をもって戦った人々を自分の信念のために戦った英雄だと見なせば、普通の人々は過去のなかに誇りを見出すことができ、そして北部も南部も記念事業に参加できることになるのであった」。ボドナー317頁。

ただし、多くの黒人にすれば、南北戦争の物語の中で自分たちの先祖は、戦いの客体ではあっても主体ではない（むろん、多くの黒人兵も従軍し、その死亡率は白人兵を大幅に上回っているのであるが）。そのためか、ゲティスバーグ国立公園の中に

は黒人観光客の姿は少ないように思われる。私が参加した公園内のバスツアーでは、乗客44人中、43人が白人だった。

なお、日本でも、『平家物語』や『太平記』の「語り」は、聞き手の縁者が、その国家的イヴェントにどのように関わったかを示すべく、諸国を遍歴してなされてきたところがある。

- (42) Neff, pp. 41-45; Faust, pp. 6-12. また、NeffによるDeathbedの分析は、後述のように、リンカンの死の受け止めの分析でも興味深いものを示している。
- (43) Neffは、南北戦争を機にエンバーミングに関わる特許件数が飛躍的に増加していることを示す。Neff, pp. 47-49. アリエスも、アメリカの葬儀の文化が、南北戦争を機に大きく変わったとしている。Ariès, *Essais sur l'histoire de la mort en Occident*, pp. 68-69.
- (44) 戦場にはそれ以外にも見物人が多く集まった。Neff, p. 43. トルストイの『戦争と平和』で、軍に属するのでもない登場人物が、戦闘の現場を走り回る場面があるが、当時とすれば、荒唐無稽というものでなかったのだろう。
- (45) Faust, pp. 15-18.
- (46) ここでは次も参考にした。Edward Steere, *Shrines of the Honored Dead: A Study of the National Cemetery System*, Department of the Army, Office of the Quartermaster General, 1953-1954.
- (47) 対比的に検討するなら、近代日本の場合は、明治以後、急速に火葬が普及したこと、また、すでに江戸期において寺請制度が整備されていたことから、死者は、その骨をその者の属する「家」の菩提寺に葬る、そして、その位牌をその「家」の仏壇におく、という形式が一般的であったため、国家が国立墓地を整備しなければならぬ必然性は乏しかったと言えよう。それ故、国家的な武勲顕彰の場は、死者の墓地とは別に設けられる必要があったと考えられる。
- (48) 南北戦争前では、1846-48年の米墨戦争におけるアメリカ軍の戦死者の墓地がメキシコシティに作られているし、その後のものでは、両次の世界大戦で戦死したアメリカ兵の墓はヨーロッパ各国で見ることができる。第一次大戦を例にとると、1920年から22年まで死者のためのhomecoming projectが行なわれて約5800体がアメリカに戻り、そのうち、5241体はアーリントンに埋葬されたが、約30000体はヨーロッパに残った。Poole, p. 146.
- これは、墓地において当該死者の近縁者が定期的に儀礼を営む必要のある宗教の信徒がいなかった（少なくとも、多くはなかった）という事情を反映していると言えよう。ただし、その条件は、その葬られた土地が敵地ではないこと（少なくとも、死後その墓に対して冒瀆が加えられることがないと期待される土地であること）である。
- (49) Neffは、黒人と同じ扱いをされることを死者への侮辱と感じる者の多かった時

代に、自ら率いた黒人兵とともに葬られたいと望んだ白人将校のいたことを紹介する。Neff, p. 63. ただし、現在のアーリントンでは、特別に功績のあった死者は、墓標の形は同じでも、名前の前に IN MEMORY OF と特に刻まれた墓標の下、memorial section に埋葬され得る。

- (50) 最も重要な団体が Grand Army of the Republic (GAR) である。
- (51) Neff, p. 134.
また、第一次大戦後には、アーリントンも、アメリカでの凱旋門やウェストミンスターとなるべきだという主張が現れ、いっそうの整備が進められることになる。Poole, p. 147.
本稿の冒頭に紹介した衛兵による「無名戦士の墓」前での交代儀礼も、それほど歴史の古いものではない。1920年代初めには、墓のまわりで狼藉があったり、ゴミが捨てられたりしていたため、1923年によくフェンスや民間の警備員がおかれるようになるが、それでも十分ではなく、ヴェテラン団体の圧力もあって兵士による監視が始まるのは1926年、深夜の歩哨が立つようになるのは1937年のことである。Poole, p. 169, 263.
- (52) リンカーンは1865年3月4日、二期目の大統領の就任演説では、「なんびとに対しても悪意をいだかず、すべての人に慈愛をもって、神がわれわれに示し給う正義を固く守り、われわれは今行ないつつある仕事をなし遂げるため努力しようではないか。国民の傷をつつみ、戦闘でたおれた者、その未亡人、その孤児をいたわるために、努力しようではないか。それによって、わが国民の間にも、またすべての国民とも、正しくかつ恒久的な平和がもたらされ、いつくしまれるように」と述べている。ちなみに、1945年9月の日本の降伏文書調印式典で演説したマッカーサーは、この演説の最初の文言をそのまま用いている。演説の訳は、本間長世『リンカーン—アメリカ民主政治の神話』中公新書、1968年、159頁によった。
- (53) Neff, p. 57-58.
- (54) デコレーションデイの発祥地については諸説あるが、最初のメモリアルデイの公的行事は、1868年5月30日にアーリントンで、当時GARのCommander in ChiefだったJohn A. Loganの“Memorial Day Order”によって始まっている。
- (55) Neff, p. 146.
- (56) Neff, p. 166.
- (57) Neff, pp. 162-163.
- (58) Harmond & Curran, p. 18.
- (59) Poole, p. 113. 現在、Confederate Section 以外で見ることが出来るConfederateの墓が、このときにつくられたものかは未確認。私が第13区画で見つけたものは、Confederate Sectionにあるのと同型の、幅約12インチの墓標だった。

- (60) ただし、この reunion には、黒人は考慮されていなかったという重要な指摘がある。
- (61) マッキンレー政権で作られた Confederate 埋葬のための規定によると、墓標の大きさは Union のものと同じく、高さ 36 インチ、幅 10 インチ、厚さ 4 インチ、とされている。Poole, p. 116. これは私が実測した第 16 区画に実際に置かれているものとは、幅が異なる。
- (62) これと同じ形状の墓標は、国立墓地以外、例えば、リッチモンドのハリウッド墓地でも見られるが、そこで私が確認したものは幅が約 13 インチもあった。
- (63) Neff, p. 6.
- (64) 北軍兵士は、敵地の中で黒人奴隷を解放するために戦い、死んだことを顕彰されたのである。この「語り」は、「自由」のために自国以外の領域で戦闘することを正当化すると同時に、自国の兵士が他者の自由のために死ぬことに最大の名誉を与えようとするものである。
- このような勝者の「語り」が、その後のアメリカの対外戦争の戦死者顕彰において反復されていることは言うまでもない。例えば、ウィルソンが、1919 年のメモリアルデイで、“We commemorate not only the reunion of our own country but also now the liberation of the world from one of the most serious danger to which free government and the free life of men were ever exposed.” と謳い、また、アメリカ軍兵士を十字軍に喩えていることにもそれは見える。Harmond & Curren, pp. 42-43.
- 逆の面からすると、ベラーも言うとおり、アメリカ諸州の中では、南北戦争時代の南部だけが近代戦争の惨禍を直接味わっていることに注意。ベラー『破られた契約—アメリカ宗教思想の伝統と試練』（松本滋・中川徹子訳）未来社、1983 年、261 頁。
- (65) Neff, pp. 161-163.
- (66) 「南部人は文学や教育や公的記念行事において「失われた大義」と呼ばれる一連の記憶をつくりあげるために、1880 年代までに膨大な労力を注ぎ込みはじめたのである。この解釈によれば、南北戦争で南軍兵士は勇敢に戦い、ただ数の点でのみ北軍に敗れたとされる。南部人は崇高な大義を抱いて戦ったのであって、何ら恥じ入る理由はない。実際、ロバート・E・リーなどの指導者は、戦後には抵抗の継続ではなく、南北間の和解を説き、国民国家にとっての愛国者と見なされたのである」。ポドナー 54 頁。
- (67) 彼の Anne Marshall への手紙は、現在ゲーテンベルグプロジェクトで読むことができる。
- (68) ここでの国家と土地相続の関係についての私の理解は、基本的には、マックス・ウェーバーの『古代社会経済史』（弓削達・渡辺金一訳）東洋経済新報社、1959 年

に負っている。

- (69) ボドナーは、「エイブラハム・リンカンが、有力な歴史上のシンボルとしてしだいに浮上してきたのも19世紀末である」としている。ボドナー59頁。だが、本間長世は、リンカンの神格化は死後すぐ始まったとしており、Neffも死の直後から聖書と対応させた解釈が現れていること示している。本間179-180頁。Neff, p. 84.
- (70) ベラー第1-3章。
- (71) Neffはこれをアメリカ史上最長の葬儀と呼んでいる。Neff, p. 81.
- (72) Neffはリンカンの葬送がアメリカにおける新しい葬儀文化を生んだと言う。ただし、リンカンの「良き死」の場面を国民に広く伝えた挿画は、事実を反映していないとのことである。Neff, pp. 70-74.
- (73) 南部からすれば、リンカンは自由の侵害者だったのであるから、その罰を受けたカエサルにすぎないという解釈が成り立つ。
- (74) Neff, pp. 84-88.
- (75) しかし、リンカンのゲティスバーグ演説で言及する「この土地で戦った勇敢な人々」が、Union側だけを指すのか、それとも南軍Confederateの戦士をも含むのかについては、争いがある。Garry Willsは、南北両軍の死者を含むと見るが、Neffはそれを否定する。これはゲティスバーグ演説の含意と射程を考察する上で極めて重要な論点である。Garry Wills, *Lincoln at Gettysburg: The Words That Remade America*, Simon and Schuster, 1992, p. 37; Neff, p. 111.
- (76) ボドナーは、「南北戦争後、北部の知識人たちは「ナショナリズムの有機体説」を唱え、アメリカのナショナリズムや愛国主義の意味すら変容させた」と批判的に述べる。このような有機体説批判は、ファシズム・全体主義批判と連続するものであるが、本稿は、国家を分割不可能な「からだ」と見る受け止め方は、国内における不全な部分に対する懲戒的な改革（「肉欲への戒め」に等しい）を促す側面があったのと同時に、他面では、内戦の敗者の尊厳への敬意をも可能にするという逆説をはらむものであったと考える。ボドナー62頁。
- (77) ベラーは、このような南部の挫折感を、悲劇の真の理解へと深めたものとして、ウィリアム・フォークナーの作品に注目する。それは、南部の敗北とは、軍事的敗北ではなくて、それに続く貪欲な営利主義的価値への敗北であることを容赦なく描いたと言う。「フォークナーは、土地の強奪とか、頑固一徹で、窮境にあった小農階級の崩壊とか、営利主義的価値による南部の中流および上流階級の墮落とかを描いているが、その姿は南部特有の脈絡を超えて、アメリカ全般にあてはまるものであった」。ベラー261頁。
- (78) しかも、勝者であっても正義を当然に得られるというものでもない。南北戦争

において北部は高邁な理想を掲げて兵を動員したが、実際に従軍した兵には、理想と現実のギャップに心的障害をおわされる者が多かったとする研究がある。このような事態は、南北戦争から100年たってもまた繰り返されていることであろう。Eric T. Dean Jr., *Shook over Hell: Post-traumatic Stress, Vietnam, and the Civil War*, Harvard University Press, 1997.

- (79) 日本の靖国神社は、(原則として)大日本帝国の全ての戦死者を対象にすることを理念としている点で、ウォーメモリアルとしての性格を持つ。これは靖国が特定の戦争の特定の戦死者のための墓地ではないからこそ可能となったものである。だが、それら全ての死者の魂魄、「みたま」をここに「祀る」としている点で、すなわち、戦死者は死後そのような魂魄になるという想定、そして、その魂魄を国家による神道の儀式がコントロールできるとする想定の上に成り立っている点で、近代国家の戦死者メモリアルとしては特異である。

そして、そこを中核に公共的記憶として形成された戦死者の死についての「語り」のパターンは、もともと、戦勝者側のみの死者の顕彰としてあったから、第二次大戦における敗軍の死者を何らかに正当化しようとするときには、当然に不整合を来すことになるのである。そもそも、戊辰戦争以来靖国に祀られた死者の顕彰の「語り」は、これら死者と戦った人々の存在を顕彰の外部においてきた。ウォーメモリアルが一方的であるのは常套的なことではあるが、とりわけ靖国の場合は、戊辰戦争において勝った側を官軍として正当化するところから始まっているため、敗者は「賊」という位置づけしか得られない。ここからは、自国が敗れたとき、すなわち自国に勝った敵方の存在を前提にして自国の戦死者の死に正当化を与える論拠への回路は、容易には見出せないであろう。靖国に祀られた死者は戊辰戦争以降勝者の側の死者だけであったという点については、小島毅『靖国史観—幕末維新という深淵』ちくま新書、2007年に示唆された。